

# pro natura ニュース

## け 気のことなど

大谷 一良 (当基金監事・版画家)

け  
氣という言葉をある日思い出した。

二、三年前のことだったろうか。都内の美術館にスイスの「山に魅せられた画家たち」という山の絵の展覧会を見にいった。十八世紀初めから現代までのさまざまな山の絵があったが、「山の絵」についての私の持っていた思いとはかなり違うことに気がついた。

古典的で壮大な山の風景の写生、個性的に自然を切り取る表現やロマン派的な表現、十九世紀末から二十世紀初頭の著名なセガンティーニやホドラーの時代。そして、ドイツ表現派の影響から、絵は山の形を離れ赤や黄の鮮やかな造形的、あるいは非具象の世界にいくという構成だった。解説によると、山を描くことによる芸術的展開は、ホドラーをもって終焉をむかえたという。

一方、二十世紀はじめの日本でいうと、文人を中心とする登山の流れから、山の文学、山の絵画の分野が生まれて登山の記述、山の表現への志向にむかった。絵の技法としては江戸木版画からは離れたものの、西洋技法の影響から西洋風写実画が中心で、山に登って山を描くという方向にむかい、昭和に入ってもその傾向は続いている。

この彼我の違いは一言では、むこうは画家個人の表現の題材として山を扱うが、こっちは登山という行為と山の姿に精神的、心情的なものを見てそれを文学・絵画で表現する傾向がつよく続いてきたといえそうである。このことには自然に対する態度や思想の歴史的な違いからきているように思われる。

さてスイスの絵に戻るが、セガンティーニは私は山岳画家だと思ってその山の絵を見てきていたが、ホドラーの絵と比べるとなにかが違う。アルプスの山の光景やその空気はもちろん十分に伝わってくるのだが、ホドラーの描く山の大きな表現とは違う。

そのときふと思いついたのが、「け  
氣」という言葉だった。「山の氣」。これは昔からいわれていた言葉ではなかったか。「森の氣」、「山の氣」。「氣」とは「なにかが存在する気配」。この「氣」という言葉でそれぞれの絵を見ると、違いは「氣」の違いといえる。ホドラーの絵には「山の氣」が感じられたが、セガンティーニにはそれがどうも薄い。彼は山の画家だとの思い込みが強すぎたのだろうか。

私事に亘るのを許していただければ、私は山に登り長年山の絵を描いてきた。木版画なので写生をそのまま作品にしたことはないが、前述した日本の山の絵の風土のなかにいて風景画と山の絵とは別だと思い続けてきた。自分の中に深く這入り込んでしまった、山に登る悦び、山の美しさ、また静けさ、怖さ。絵は写生ではなかった。絵はいわば抽象の行為ではあるけれども、私にとって山を描くというのは「山の氣」を表すことではなかったろうかという思いがそこで一緒になって、「氣」という言葉が形になったようである。

こうして、風景画と山の絵との違いは、その「氣」の表現の違いにあるという言い方を思いついて、私はひどくすっきりした。山の姿を描けば、すべて山の絵だというわけではない。感じ方はひとによって違うけれども、山に登る悦びを知っている方にはわかってもらえるような気がする。

山の絵画と並んで、山の文学という言葉は、日本固有のものかもしれないが、文字による山の表現は、絵画よりもはるかに広い。戦後のある頃まではこの傾向が続き、山に登らないときには静かに山の書物を読む悦びを見つけたものだ。数多くの山の本には「山の氣」が濃く香っているのはいうまでもない。

日本では昔から自然と共に生きるといった自然観が続いてきた。前に述べた西欧の思想との違いである。

(回 8ページに続く)

# 平成20年度 助成事業報告（見込み）

平成20年度の助成総額（予算） 9,000万円

## ●共同助成事業

I. P.N.ファンド	
(財)日本自然保護協会との公募助成	
28件	2,612万円
II. ナショナル・トラスト	
(社)日本ナショナル・トラスト協会との 公募助成	5件 1,522万円

## ●自主助成事業

III. 有力保護団体助成	
1 (財)日本自然保護協会	2件 400万円
2 (財)世界自然保護基金	3件 400万円
3 国際環境NGO FoE Japan	2件 200万円
4 (財)山階鳥類研究所	1件 200万円
IV. 直接助成	
(当基金が緊急且つ重要と認める 自然保護に資する各種助成)	7件 1,917万円
	未定 1,083万円

\* 上記 I ~ IV の内容は下記

## ■助成内容（助成先・テーマ等）（未定分含まず）

		助成額
I P.N.ファンド第19期（平成20年度）助成（明細次頁）		2,612万円
II ナショナル・トラスト活動助成		
① NPO法人 阿蘇花野協会（3年目継続）	・ナショナル・トラスト維持・管理費	50万円
② NPO法人 カラカネイトンボを守る会（3年目継続）	・北海道・札幌市の土地取得	223万円
③ 社団法人 生態系トラスト協会（2年目継続）	・高知県・四万十町の土地取得	235万円
④ NPO法人 霧多布湿原トラスト	・北海道・浜中町、厚岸町の土地取得	579万円
⑤ NPO法人 エンハンスネイチャー荒川・江川	・埼玉県・桶川市の土地取得	435万円
III 有力保護団体助成		
① (財)日本自然保護協会	・治山ダム撤去による渓流の生物多様性復元を進めるためのモニタリング手法の検討 ・小笠原諸島・ジオエコタイプ（GET）区分解析による生物多様性保全プロジェクト	150万円 250万円
② (財)世界自然保護基金ジャパン	・石垣島白保サンゴ礁における海洋環境モニタリング調査（2008年度） ・ジュゴン・ノグチゲラ・ヤンバルクイナ生息地の調査・保護活動（2008年度） ・南西諸島における生物多様性評価プロジェクト（2008年度）	140万円 140万円 120万円
③ 国際環境NGO 地球の友ジャパン（FoE Japan）	・サハリン石油・ガス開発の環境影響における自然環境・野生生物保護のための 調査研究・政策提言・啓蒙活動（2年目継続） ・<ロシア極東生物多様性Hotspot保護戦略>沿岸地方ビキン川流域の自然・生物多様性に 関する科学的知見の普及と関心喚起を目的に行うロシア語情報の日本語資料化と公開	100万円 100万円
④ 山階鳥類研究所	・極東ロシアにおける鳥類標識調査の推進（3年目）	200万円
IV 緊急且つ重要な直接助成		
① 小笠原諸島自然環境保全機構（調査・研究）	・小笠原諸島におけるボランティア活動による外来種対策（2年目）	1,000万円
② カラ・カルスト地域学術調査委員会（略称：コウモリ類学術調査委員会）（調査・研究）	・新石垣空港建設予定地及びその周辺の洞窟群に生息する絶滅危惧種コウモリの生息実態に 関する学術調査（夏期調査）	57万円
③ 日本アルプス雷鳥研究会（調査・研究）	・日本アルプスにおけるライチョウ生息数に関する調査【2008年朝日岳・御嶽山・火打山調査】	100万円
④ 有明海環境生態系調査・研究プロジェクト（調査・研究）	・有明海奥部海域の水質・海底環境の現状と課題	123万円
⑤ 南アルプス食害対策協議会（調査・研究）	・ニホンジカによる食害が深刻な南アルプス北部における被害実態調査と高山植物等の緊急保護（長野県側）	411万円
⑥ 日本山岳会 自然保護委員会（活動）	・高山帯におけるニホンシカの食害問題の重大性と緊急性を広く世間にアピールし、併せて、 われわれ山岳団体として取り組める対策について検討する。	76万円
⑦ 南アルプス高山植物保護ボランティアネットワーク（活動）	・南アルプスにおける高山植物のニホンジカ食害対策（静岡県側）	150万円

## 2008年度（第19期）プロ・ナトゥーラ・ファンド決定先一覧

### ■国内研究助成 8件 小計860万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	決定額
1	マクロサテライトDNA解析による希少種イトウの遺伝的構造の解明および遺伝的指標を用いた保全策の提言	イトウ生態保全研究ネットワーク	江戸 謙穎 (文化庁記念物課天然記念物部門 文化科学技官)	109	109
2	沖縄島で再発見された絶滅危惧種オキナワトゲネズミの保全のための調査	アージ研究会	河内 紀浩 (島嶼生物研究所 代表)	150	150
3	国内希少種のヤマネコ類と人間の共存にむけた基礎研究—人間活動へのヤマネコの生態学的反応—	琉球大学ヤマネコ生態研究グループ	伊澤 雅子 (琉球大学理学部海洋自然学科 教授)	137	137
4	霧ヶ峰におけるイタドリ綠化導入個体による地域個体群の遺伝的影響の分析	生物多様性綠化研究会	小林 達明 (千葉大学園芸学部 教授)	108	108
5	三浦半島周辺のカンムリウミスズメ保護のための調査	城ヶ島沖の海鳥観察グループ	宮脇 佳郎 (城ヶ島沖の海鳥観察グループ 副代表)	138	100
6	GISを用いたツキノワグマにおける保護管理対策の評価	ツキノワグマ保護管理ネットワーク	山本 俊昭 (日本獣医生命科学大学・獣医学部 講師)	81	81
7	北海道に分布する希少種ノサップマルハナバチにおける侵入外来種の影響と遺伝的多様性に関する研究	マルハナバチ保全研究グループ	高橋 純一 (京都大学生態学研究センター 研究機関 研究員)	105	105
8	岩手県における水禽および猛禽類の鉛中毒の実態調査	いわて野生動物保護ネット(IWC-net)	高橋 知明 (たかはし動物病院 獣医師)	100	70

### ■国内活動助成 13件 小計823万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	決定額
1	市民参加による、ジュゴン生息域の海草藻場のモニタリング調査	シーグラスウォッチ・ジャパン	河内 直子 (北海道大学厚岸臨海実験所 学術研究員)	51	51
2	長野県安曇野のオオルリシジミ自然個体群の回復のための保護活動	安曇野オオルリシジミ保護対策会議	那須野 雅好 (安曇野市教育委員会 文化財保護係長)	62	62
3	研究成果「台風による樹木倒木をとおして明らかになった軽井沢の本来の自然」の普及活動（出版）	軽井沢自然地理研究会	江川 良武 (軽井沢文化協会)	24	24
4	香川県産ニッポンバラタナゴの統計保存のための保護池造成（継続）	かがわタナゴ俱楽部	横井 聰 (三菱マテリアル株式会社直島製錬所 顧問)	82	82
5	日本の重要野鳥の生息地（IBA）普及のための英文ホームページの作成	(財)日本野鳥の会	古南 幸弘 (財)日本野鳥の会 室長)	219	105
6	長島（山口県熊毛郡上関町）の貴重な自然環境及び生態系についてのガイドブックの作成	長島の自然を守る会	高島 美登里	100	60
7	小笠原の固有トンボ類再生・保全のための活動	NPO法人 小笠原俱楽部 トンボプロジェクトチーム	島田 克己 (ボニンブルーシマ 代表者)	105	105
8	北海道淡水魚フォーラム「サクラマスの再生をめざして」	北海道淡水魚保護ネットワーク	後藤 晃 (北海道大学大学院水産科学研究院 教授)	42	42
9	霧ヶ峰における草原保全活動推進のための啓蒙資料作成と活用	霧ヶ峰ネットワーク	熊田 章子 (株式会社地域環境計画)	83	80
10	豊かな自然との共存を目指してこれからの野生鳥獣対策を考える	生物多様性保全ネットワーク 新潟	諸橋 潔 (生物多様性保全ネットワーク新潟 代表)	32	32
11	地域連携による生態学教育プログラム「人と自然と生態学」	岩手生態学ネットワーク	松政 正俊 (岩手医科大学 共通教育センター・生物准教授)	75	50
12	砂浜侵食が進む宮崎県住吉・佐土原海岸の市民調査をもとにした行政への侵食対策の働きかけ	ひむかの砂浜復元ネットワーク	林 裕美子 (ひむかの砂浜復元ネットワーク 代表)	99	50
13	沖縄やんばるにおける森林整備事業の実態調査にもとづく自然保護の普及・啓発	沖縄やんばる自然環境保全・再生研究会	関根 孝道 (関西学院大学 教授)	80	80

(次ページ下段に継ぐ)

## ナショナル・トラスト活動助成の紹介

### NPO法人カラカネイトトンボを守る会

所在地：札幌市北区 原野 0.4ヘクタール

助成金額：709万円（2006—2008年度）

北海道石狩川の下流域にはかつて広大な湿原が分布していました。しかしいまやそのほとんどが埋め立てられ僅かに点在するばかりとなっています。札幌市の北部にある篠路福移（シノロフクイ）湿地は、市内に残存する唯一の湿原ですが、面積僅か20ヘクタールに過ぎず、しかも周囲から埋め立ての手が伸びて、もう3ヘクタールが残存するのみです。このまま放置すれば、数年で湿原は消滅しかねません。しかし僅かながらミズゴケが生育し、辛うじて湿原の名残をとどめています。そしてこの狭い湿原にトンボの希少種カラカネイトトンボやシジミチョウのゴマシジミ、淡水魚でエゾホトケドジョウ、エゾトミヨ、ヤチウグイなどRDBにリストアップされた小動物が生息しています。

この湿原は地元の高校の理科研究部が、観察を行っていたのを引き取り、地域の協力者が集まってこの「守る会」を設立し、いまは活発な保護活動を行っています。この区域はかつての原野商法の対象となって



カラカネイトトンボ（カラカネイトトンボを守る会提供）

いた場所で、数百筆に細分されており、守る会では、丹念に所有者を調査して、判明した先約200人に譲渡依頼のダイレクトメールを送るなど苦労を重ねてきました。そして3年にわたりこの活動助成制度を利用して17区画を保有することとなり、この土地の埋め立て阻止に大きな力となっています。

この守る会は本年第10回水大賞の環境大臣賞を受賞して、会員の皆さんも保護活動にますます力が入っています。

（☞前ページから続く）

#### ■国内長期事業助成 2件 小計400万円

(万円)

No.	テーマ	グループ名	代表者名	申請額	決定額
1	兵庫県但馬地方に生息するニホンザル地域個体群の絶滅防止と軋轢解消	ひょうごWCM研究グループ	鈴木 克哉 (兵庫県立大学自然・環境科学研究所 助教授)	365	200
2	ニホンジカによる過採食が芦生の冷温帯天然林の生物多様性と生態系機能に及ぼす影響の解明	芦生生物相保全プロジェクト	福島 慶太郎 (京都大学 博士課程)	247	200

#### ■海外助成 5件 小計529万円

(万円)

No.	テーマ	申請者名	推薦者名	申請額	決定額
1	ロシア日本海沿岸部におけるクロツラヘラサギ個体群の調査	Yuri Shibaev	藤巻 裕蔵 (山階鳥類研究所 客員研究員)	120	120
2	マレーシア・サバ州、クリアス半島のテングザルの保全（継続）	Henry Bernard	半谷 吾郎 (京都大学靈長類研究所 准教授)	80	80
3	ロシアのムラヴィオフカ自然保護区における水環境の変化や気候変動がツル類、コウノトリ、並びに湿原生態系におよぼす影響について	Sergei M.Smirnenski	百瀬 邦和 (NPO法人タンチョウ保護研究グループ 理事長)	100	100
4	マレーグマとその森林生息環境の保全に関する東カリマンタンでの地域社会への普及啓発活動	Gabriella M.Fredriksson	山崎 晃司 (茨城県自然博物館 首席学芸員)	120	120
5	アルゼンチン国パタゴニアカイツブリの繁殖地における個体数と繁殖湖沼の現状調査	佐藤 やよい	多喜代 道徳 (元JICA国際協力機構 日系社会シニアボランティア アルゼンチン共和国 社会福祉指導派遣)	109	109

プロ・ナトゥーラ・ファンド助成金総額 合計 28件 2,612万円

## (社)生態系トラスト協会

所在地：高知県四万十町下道 山林 7ヘクタール(2007年度) + 2.6ヘクタール(2008年度)  
助成金額：601万円



ヤイロチョウ  
(生態系トラスト協会提供)

ヤイロチョウは、ボルネオ島などで越冬し、5月に飛来する夏鳥ですが、数は少なく、せいぜい100～150羽といわれ、絶滅危惧Ⅰ B類に指定されています。八色鳥の名のとおり大変派手な色をしていますが、めったに姿を見せることがなく、幻の鳥といわれます。

この希少な鳥が毎年飛来する場所が、四万十川上流の谷にあります。杉の植林帯の間に広葉樹林が散在した山々に囲まれた小さな山村ですが、毎朝この鳥の声が響き、村入たちは、姿は見えなくてもヤイロチョウに親しみを持っています。

高知で野生生物の保護に携わってきた中村滝男氏は、この地に注目して、氏の主宰する(社)生態系トラスト協会の名義で、この地の広葉樹林を少しづつ譲り受け、「ヤイロチョウの森」と名付け、すでに33ヘクタールの山林をトラスト地としてきました。今回さらに8ヘ

クタール以上の森を入手、ゆくゆくはこの谷を囲む森の半分を所有し、人工針葉樹林を広葉樹林に転換するという夢を持って保護に取り組んでいます。



トラスト地として新たに購入した土地(明るい三角の広葉樹林)  
〔岡本寛志撮影〕

## 助成先／助成案件の紹介

### 日本アルプスにおけるライチョウの生息状況と生息数に関する調査

助成先：日本アルプス雷鳥研究会

助成金額：200万円 (2006年度および2008年度各100万円)



ライチョウ [中村浩志教授提供]

ライチョウは、日本の高山鳥を代表する鳥で、南北日本アルプスを象徴する鳥でもありますが、地球温暖化により、高山帯の生態系に危機が迫る中、山岳地帯の開発に伴い、ニホンザルやキツネが、その生息域を脅かすようになり、急速にライチョウの生存数が減少しています。それに加えてこの数年、ニホンジカも高山帯に出没し、高山植物を食い荒らすようになり、ますますライチョウは追いつめられています。レッドデータブックでは、絶滅危惧Ⅱ類(VU)に分類されています。

わが国のライチョウ研究の第一人者である信州大学中村浩志教授は、こうした事態を憂慮して、以前の大規模調査から二十数年を経たこともあり、改めて、北アルプスの山岳ガイド組合なども動員

して同様な調査を始めました。今回昨年・今年で当基金の助成を受けて、塩見岳、白根三山、北アルプス表銀座、朝日岳、御岳、火打山の調査を行っています。

この結果、下表のような深刻な状況が浮き彫りとなりました。

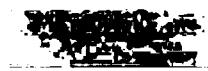
この結果をもとに同研究会では、ライチョウの絶滅の危機をいっそう強力に訴えようとしています。

ライチョウ調査による推定なわぱり数(番の数)

調査年	塩見岳	白根三山	燕—大天井	大天井—常念	朝日	御岳	火打山
1967—1982	34	63	24	32	19	50	7
2007—2008	13	13	17	15	7	28	12
増減	-61%	-78%	-29%	-53%	-63%	-44%	+41%

# 高山・亜高山帯の植生の危機

—シカの食害が生態系を破壊する—



いま日本の高山帯・亜高山帯では、シカの食害により、植生が激変しつつある。各地でシカの個体数が急激に増加し、山麓の畑や牧草地ももちろんだが、樹林帯の林床植物から樹皮、高山のお花畑にいたるまで、徹底的に食い荒らされ、その後は裸地化したり、シカの食べない植物だけが残り、単純な植生に変化したりしてしまっている。樹木も皮剥ぎで立ち枯れ、稚樹は食われて育たない。それが一部の土地ではなく、広範囲が徹底的に荒らされてしまうのだ。一度シカが現れた地域は数年の間に徹底的に破壊され、生態系は壊滅状態となる。そのすさまじさはサンゴ礁を食い荒らすオニヒトデに対比されるが、被害はオニヒトデよりも広範である。影響は植物だけでなく、そこに住む鳥類を始めとする動物類も生息地を奪われる。ライチョウも危ない。

どうしてこんな状態に立ち至ったのか。それは主として温暖化が進み、山の積雪が減ったことによる。シカは雪が苦手で、冬は食べ物が不足し栄養失調で多く死亡し、個体数が調整されてきた。それがいまや雪が少なくなつて栄養状態が良くなり、繁殖率も高くなつて急激な個体数増加が始まった。しかもシカの天敵であるオオカミはとうの昔に絶滅してしまっている。爆

発的に増加したシカたちは初夏のころ、食べ物を求めて山の麓の森から次第に上へ、上へと向かう。幸い歩き易い林道や登山道が発達して、山上に向かうのも楽になった。

こうして従来考えられなかった高山帯にまで入り込むことになったシカたちは、柔らかい高山植物を片端から食い尽くす。そのすさまじさは、毒草といわれるキンボウゲ類から、バイケイソウ、ウシも食べないレンゲツツジ、はてはトリカブトまでも食べてしまうという。南アルプスの広大で華麗だったお花畑はいまや花のない貧弱な草地か裸地となり、一部のお花畑はシカが食べないマルバダケブキの単純な群落に変化してしまった。高山帯の低木林はシカたちの夏の住み心地よい避暑地と化しているのである。

こうした被害は、北は北海道の知床、阿寒、富良野などのエゾシカから、東北を飛び越して日光・尾瀬、もっとも早くから被害の出ている奥秩父・秩父・丹沢、八ヶ岳、美ヶ原、北は北沢峠から南は光岳に至る南アルプス全域、大台ヶ原、大峰山系、京都北山、四国剣山系、九州背梁山脈、そして屋久島のヤクシカと、ほとんど全国にひろがっている。

いま2010年のCOP10に向けて生物多様性国家戦略の見直しが行われており、人間による生態系の破壊、里山の危機、外来種・化学物質による危機の三つの危機対策が採り上げられているが、皮肉にもこのどれにも属さない生物多様性の重大な危機が急速に拡大しているのである。これを放置すればCOP10の時点で、日本はいったい何をしているのかと糾弾されることになろう。しかし「三つの危機」で固まった政策を大幅修正するゆとりは政府にはなさそうだ。



かつて南アルプスの代表的お花畑だった仙丈岳馬ノ背の惨状。花は無く単純な草地か裸地になっている【岡本寛志撮影】

ではどうすればこの危機を回避できるのか。幾つかの問題がその解決を阻んでいる。まずシカなどのくらいどこにいて、どう行動しているのかが明らかでない。個体数がわかって一定数引くにしても、それをどこでどう捕らえるかが問題となる。射殺するとなると相当のハンターを集めねばならないが、いま日本ではハンターが減少していて、しかも老齢化している。また捕らえる場所が山の上だと、死体処理も困難となる。さらにシカは必ずしも群れで行動しているとは限らないのだ。

いま危機意識を持った幾つかの自治体と自然保護団体などが、少しでも高山のお花畠を護ろうと動き出している。シカに食われないうちに、また食われても回復可能な場所の一部をこれ以上食われないために、防護柵で囲む作業を行っている。囲む範囲は限られ、しかも根本的な解決策にはほど遠いが、貴重な固有種などの絶滅を防ぐ最低限度の対策である。また長野県では冬休業中の牧場に集まるシカを一網打尽に捕らえる策を始めた。研究者もシカの行動をテレメトリーで把握し、シカの食害と防護柵の植生への影響効果の調査も始めている。

当基金ではこうした動きを援助するために差し当たり次の3件の助成を行うことを決定し、また今後とも優先的に助成を行うよう考慮したいと考えている。

#### ①ニホンジカによる食害が深刻な南アルプス北部における被害実態調査と高山植物等の緊急保護

助成先：南アルプス食害対策協議会

助成金額：411万円

長野県では伊那市が中心となって、県・林野庁・信州大学・近隣市町村が合同でこの問題に取り組むこととなり、とりあえずは今年度被害のもっとも大きい仙



丈ヶ岳に防護柵を設置。信州大学は食害の実態調査と、テレメトリーを利用した鹿の行動範囲調査を行う。

#### ②南アルプスにおける高山植物のニホンジカ食害対策

助成先：南アルプス高山植物保護ボランティアネットワーク

助成金額：150万円

静岡県では、県が主導して民間団体のネットワークにより、数年来三伏峠と聖平で植生復元と防護柵の設置に取り組んで来たが、今年度は当基金の助成を得て、茶臼岳に防護柵を設置した。

#### ③高山帯におけるニホンジカの食害問題の重大性と緊急性を広く世間にアピールし、併せて山岳団体として取り組める対策を検討

助成先：(社)日本山岳会自然保護委員会

助成金額：76万円

全国的山岳団体である日本山岳会はその組織を利用して全国の鹿の食害の実態に関する緊急アンケートを集めその結果をシンポジウムで報告、さらに他の山岳団体にも呼びかけて、今後継続的にシカやクマ、ライチョウなどの目撃情報を統一形式で集める決定を行った。

## 新職員（研究員）紹介

久し振りに当財団に若い新人（といっても37歳）が入りました。若干メタボくんで奥様の厳しい管理下にあり、毎日愛妻弁当を持って通っています。パソコンにメチャ強くとても頼りになります。



## 自己紹介

2008年3月より研究員に着任いたしました日代邦康と申します。大学院時代から、山地の地形、特に崩壊、地すべりがどういった場所で発生しやすいかというテーマについて研究をしてきました。また、地学系の博物館である地質標本館に約3年在籍し、科学と社会の接点をつくる活動も行ってきました。これまでには、フィールドを歩きながら、地形や植生景観がどのようにして成立したのかということを考えいましたが、これからは、その自然をどのようにすれば守れるのかということを考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。（もくだいくにやす）

いぜんとして自然の大木や岩にしめ縄を張り崇める風習は残っている。山や川、また海や、身のまわりの目に見える自然と一緒に生きてきた知恵が、この自然観を育ててきた。「気」という言葉も、その関連で考えると納得がいくようと思われる。無理に結びつける必要もないだろうが、近年の自然保護という言葉も、科学的知見やひとが自然を支配するという考え方、古くからある自然との共生観を加えてみると、もっと素直に受け止められるのではないかだろうか。

唐突だが、数年前から醸造時にモーツアルトの音楽を聴かせた日本酒が出て私もそれを飲んだことがある。長年、モーツアルトの音楽に親しんではきたが、そこには「モーツアルトの音楽の気」という発想があったのか。「気」本来の意味合いとは異なるだろうが、音楽にも氣があるといえるかもしれない。

ところが近頃驚いたことには、貯蔵庫のリンゴにもモーツアルトの曲を数か月のあいだ毎日聴かせるのだそうである。もし同じ曲を数か月も聴かされたら、リンゴの「気」も飛んでしまうのではないかと心配になる。

## 平成19年度決算ならびに 平成20年度予算

当基金では平成20年5月12日に平成20年度理事会および評議員会を開催し、平成19年度の事業報告、決算報告及び平成20年度の事業計画、収支予算案が承認されました。決算と予算は右表の通りです。

### 第14回プロ・ナトゥーラ・ ファンド助成成果発表会

- 日 時：平成20年12月6日（土）  
9:55～17:15
- 場 所：こどもの城  
TEL 03-3797-5666（代）  
渋谷区神宮前5—53—1
- 主 催：（財）自然保護助成基金  
（財）日本自然保護協会
- 参 加 費：無料（どなたでもお気軽にご参加下さい）
- お申込み：直接会場へお越し下さい。  
途中参加も可能です。
- 詳細はホームページ  
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>  
をご参照下さい。

### 平成19年度決算ならびに平成20年度予算

(単位：円)

項 目	平成19年度		平成20年度
	予 算	決 算	予 算
(収入の部)			
基本財産運用収入	108,000,000	96,403,683	80,000,000
運用財産運用収入	50,000	385,352	300,000
雑収入	0	592,162	0
退職給与積立預金取崩収入	2,000,000	2,000,000	0
前期繰越金	82,864,521	82,864,521	58,903,910
収入合計	192,914,521	182,245,718	139,203,910
(支出の部)			
事業費	98,000,000	74,745,976	98,000,000
P.N.ファンド公募助成	(28,000,000)	(26,800,000)	(28,000,000)
ナショナル・トラスト活動助成	(20,000,000)	(13,375,500)	(20,000,000)
有力保護団体助成	(12,000,000)	(11,000,000)	(12,000,000)
緊急且重要な直接助成	(30,000,000)	(17,690,000)	(30,000,000)
事業管理費	(8,000,000)	(5,880,476)	(8,000,000)
管理費等	19,580,000	18,195,832	24,100,000
特定預金支出	30,400,000	30,400,000	400,000
予備費	300,000	0	300,000
次期繰越金	44,634,521	58,903,910	16,403,910
支出合計	192,914,521	182,245,718	139,203,910

### 編 集 後 記

お陰様で当財団も今年で設立15年目となりました。PNニュースの発刊をはじめた1994年はNo.3号まで発行しましたが、1995年以降年1回の発行としたため、このニュースは18号ということになります。今までの後記を読み返してみると、毎年、来年こそは自然にとって良い年になりますようにとむなしい願いを書き続けてきました。もう好い加減にこの願いは打ち止めにしたいのですが、これからいつまで同じ事を繰り返さなければならないのでしょうか。状況はますます厳しくなるばかりです。でも小さな努力をコツコツと積み重ねていけばいつかはきっと……。20周年に向けてがんばります。どうぞ皆様の御支援、ご協力の方、よろしくお願ひ致します。

(岡本和子記)

### Pro Natura ニュース 第18号

発行者：財團法人 自然保護助成基金  
発行日：平成20年11月25日

〒150-0046  
東京都渋谷区松濤1-25-8  
松濤アネックス2階  
TEL：03-5454-1789  
FAX：03-5454-2838  
E-mail：pro-natura@muj.biglobe.ne.jp  
<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~pronat/>